

諏訪市埋蔵文化財報告第 31 集

大安寺Ⅳ・境日向

——長野県諏訪市大安寺遺跡（11 次）・境日向遺跡（2 次）発掘調査報告書——

1995.3

諏訪市教育委員会

例 言

1. 本書は長野県諏訪市湖南北真志野地区に所在する大安寺（だいあんじ）遺跡（諏訪市遺跡番号 317）11 区および境日向（さかいひなた）遺跡（諏訪市遺跡番号 332）2 区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、住宅建設工事（大安寺遺跡・境日向遺跡）に先立つ確認調査であり、平成 6 年度国庫および県費補助事業として諏訪市が編成した大安寺・境日向遺跡調査団がこれを実施した。
3. 現地における調査は平成 6 年 10 月 6・12 日の 2 日間に行い、整理作業および報告書作成作業を平成 6 年 12 月～平成 7 年 3 月まで諏訪市社会教育センターで実施した。
4. 本書の執筆および編集は、青木・五味両名で行った。
5. 発掘調査および報告書作成に際し、調査・整理参加者のほかに小泉善市・金子清而・金子功司の各氏および長野県教育委員会文化課（敬称略）のご協力を得た。記して感謝申し上げる。
6. 本調査の出土遺物と諸記録は諏訪市教育委員会が保管している。

（大安寺遺跡出土遺物注記…………… SMD11

境日向遺跡出土遺物注記…………… S K H 2）

目次

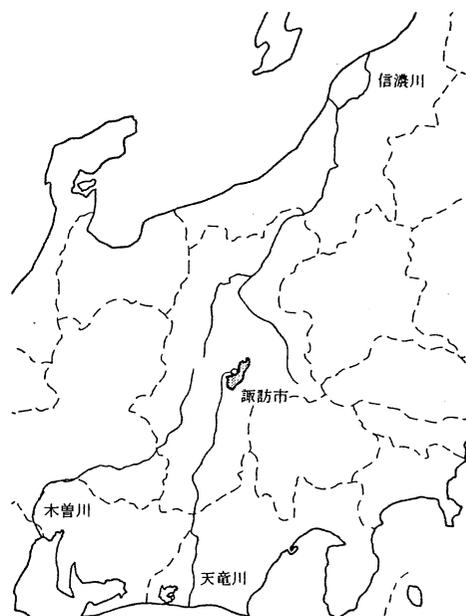
例言

目次

I	調査にいたる経過……………	1
II	調査の状況……………	2
III	大安寺遺跡の調査……………	4
IV	境日向遺跡の調査……………	8
V	調査のまとめ……………	11

写真図版

報告書抄録



I 調査にいたる経過

1. 保護協議の経過

平成6年8月、土地所有者である小泉善市氏および金子清而氏から農地の転用申請が提出された。これらの土地は、それぞれ周知の埋蔵文化財包蔵地である大安寺遺跡と境日向遺跡の範囲内であったが、大安寺遺跡については遺跡範囲の端であることおよび過去の調査により比較的遺構分布が薄い地区であることなどから、また境日向遺跡については分布調査時のデータ以外遺跡の概要を知る資料が少なかったため、協議を行った結果、まず市教育委員会が主体者となって確認調査を行うこととなった。この調査は平成6年度国庫および県費補助事業である「市内遺跡発掘調査事業」の一部として行うこととし、市教育委員会では調査団を編成してこれにあたった。

補助事業決定の経過（抄）

平成6年7月15日付6教社第116号 国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書（国庫）

平成6年7月28日付6教社第131号 文化財補助金交付申請書（県費）

平成6年8月23日付委保第71号

平成6年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知（国庫）

平成6年9月26日付長野県教育委員会教育長指令6教文第2-19号

平成6年度文化財補助金交付決定通知（県費）

2. 調査組織

大安寺・境日向遺跡調査団

団 長	吉田 守（諏訪市教育委員会 教育長）
副 団 長	伊藤文彦（諏訪市教育委員会 教育次長）
調査担当者	青木正洋（諏訪市教育委員会 学芸員）
調 査 員	五味裕史（諏訪市教育委員会 学芸員）
調査団員	小松とよみ・関 喜子・原 敏江・矢崎つな子
整理参加	茅野嘉雄（専修大学学生）
（事務局）事務主幹	宮野孝樹（諏訪市教育委員会 社会教育課長）
事務局長	藤森恵吉（諏訪市教育委員会 社会教育係長）
事務局員	五味裕史・宮下香奈子・青木正洋・田中 総
	（諏訪市教育委員会 社会教育係）

Ⅱ 調査の状況

1. 調査の方法

大安寺・境日向遺跡の試掘調査の行われた10月は、市教育委員会で平成3年度から行っている霧ヶ峰遺跡分布予備調査の時期でもあった。建設まで日数がないことなどから分布調査の調査団員のうち4名をお願いして試掘調査にあたった。調査は遺構および遺物の検出を主体におき、2×2mのグリッドを調査区内の任意の地点に設定し掘り下げる方法で行った。

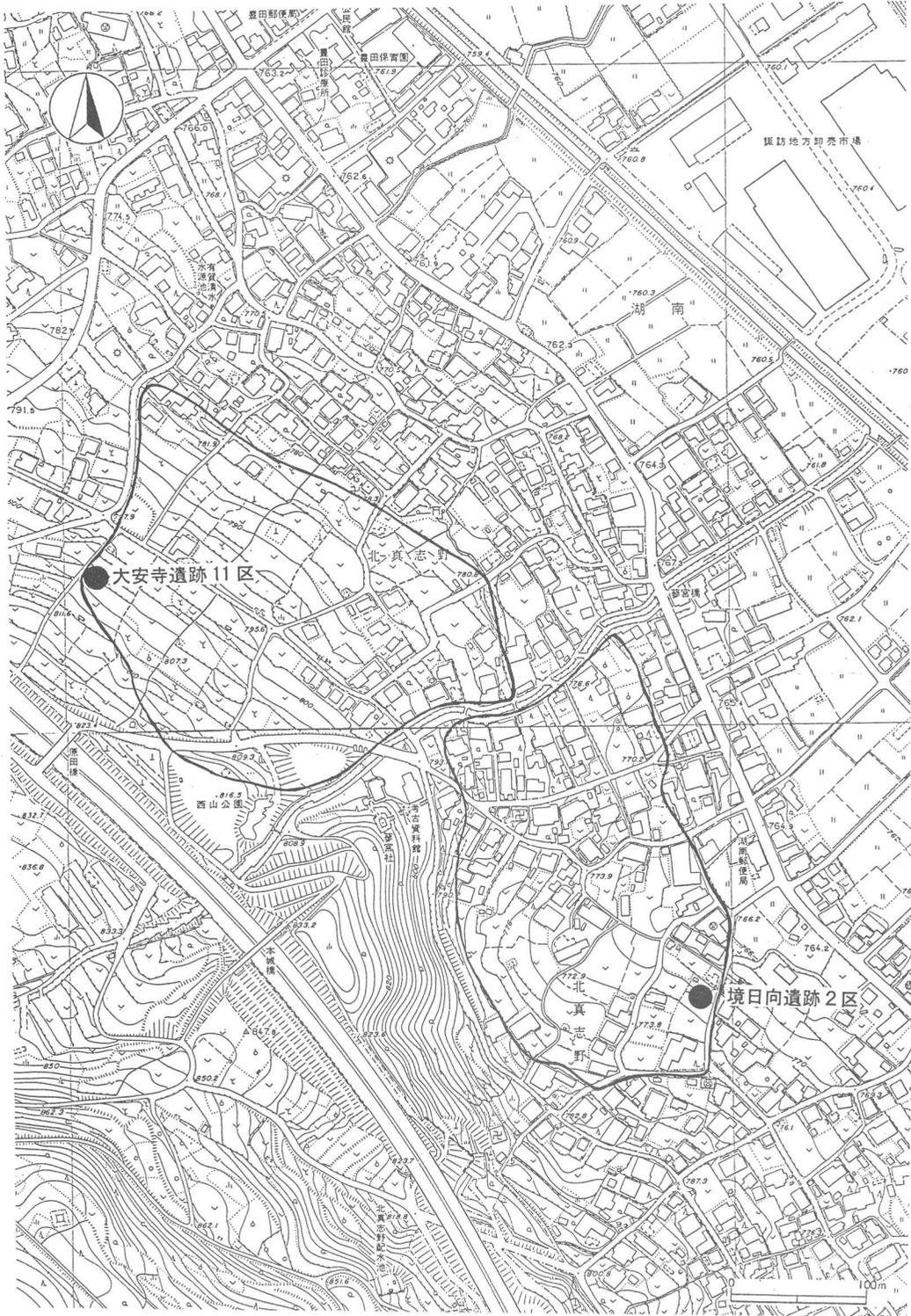
2. 調査日誌

10月6日（大安寺遺跡試掘調査）

現地集合後グリッドを設定する。地形および調査区の状況から4ヶ所のグリッドを設定し、掘り下げを開始する。No.1グリッドは浅く、耕作土をはいだところで地山ローム層が検出された。No.2から4グリッド方向に向って地山ローム面が傾斜しているようで、徐々に黒土の堆積が厚くなるが流れこみの礫も増加し、遺構の存在する可能性がなくなったため、掘り下げを終了し、土層断面図の作成および写真撮影をしたのち、全体図の作成と埋め戻しを行って、現地調査を終了した。

10月12日（境日向遺跡試掘調査）

現地集合後、地形および調査区にあわせてグリッドを5ヶ所設定し、掘り下げを開始する。グリッド設定時に黒耀石剥片や弥生土器片が表採された。総じてどのグリッドも黒土が深く、粘りのある土だったため、手掘りでは困難な状況であったが、各グリッドから黒耀石剥片などを検出した。しかしローム面は礫混じりで荒れており、遺構の存在が認められなかったため土層堆積状況の記録と全体図の作成を行い、埋め戻しののち調査を終了した。



第1図 大安寺遺跡・境日向遺跡の位置 (S = 1 / 5,000)

Ⅲ 大安寺遺跡の調査

1. 位置と環境

大安寺遺跡は、諏訪盆地南西側を画する守屋山等の山塊の山地末端部、標高約 780～810m の北東～東向きの緩やかな斜面上に位置している。ここは、中ノ沢川が山地から平坦部に流れ込む地点に発達した扇状地にあたり、付近には湧水も数ヶ所確認されている。周辺には千鹿頭社遺跡・十二ノ后遺跡・清水遺跡・本城遺跡・小丸山古墳などの縄文時代～古代・中世にわたる各時代の遺跡が隣接しているほか、遺跡の北東側には塚屋古墳が位置する。本遺跡は南半部分を中心として過去に 10 回にわたる発掘調査が行われており、縄文時代中～後期を中心とした多くの遺構・遺物が検出されている。

また、縄文時代後期初頭の「大安寺式土器」の標識資料を出土した遺跡としても知られる。

2. 過去における調査

大安寺遺跡は古くから知られていた遺跡であり、これまでに 10 次にわたる発掘調査が行われている。特に近年は、宅地化が進行しているため、住宅建設等に先立つ緊急発掘調査が多くなっている。

昭和 25 年、藤森栄一氏らは「中部山地縄文式末期文化究明のため」に発掘調査を行い、後期の敷石住居跡を発見した。土器類や石剣など、縄文後・晩期の遺物が出土している。

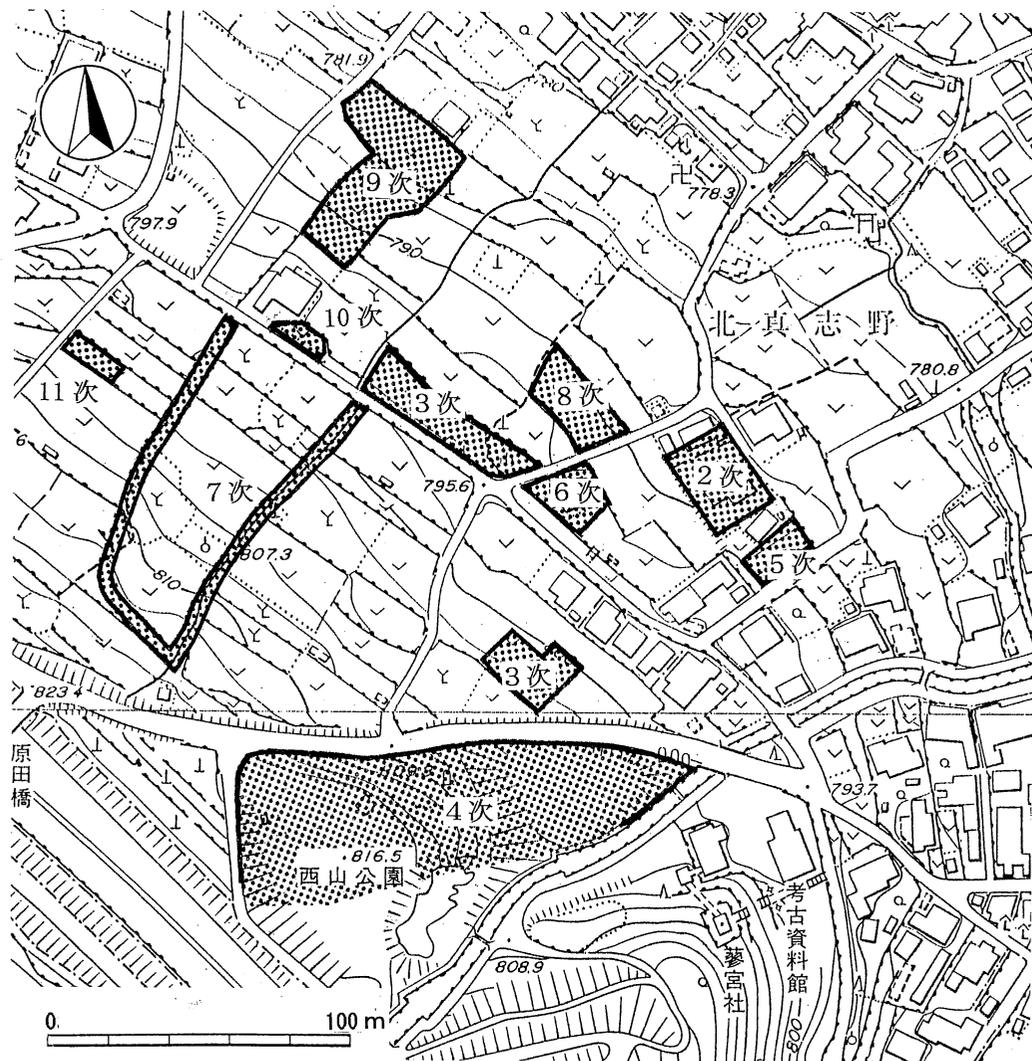
昭和 51 年、宮坂光昭氏らが遺跡範囲確認のための調査を行い、縄文中期中葉と古墳時代後期の住居跡をそれぞれ 1 基、確認している。

昭和 53 年、西山公園造成に先立つ確認調査が行われたが、遺跡南限付近にあたるらしく、若干の遺物が出土したのみであった。

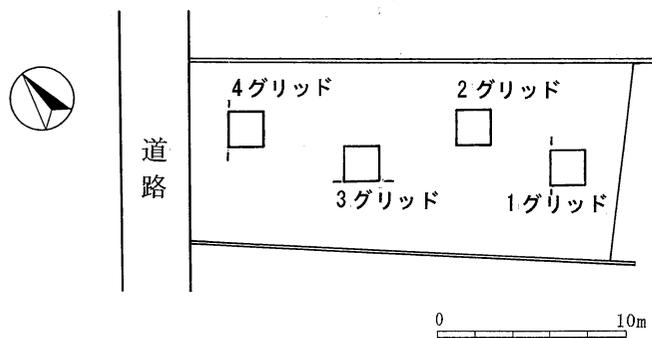
昭和 58 年、市教委により教員住宅建設に先立つ緊急発掘調査が行われた（5 区 5 次調査）。縄文後期の住居跡が黒色土中に発見されたが、平面的な規模ははっきりととらえられなかった。しかし、埋甕炉が数基、見つまっているほか、後期土器が多く出土している。なお、この調査時には、縄文時代早期の押型文土器も出土している。

昭和 62 年、住宅建設に先立つ調査（6 区 6 次調査）が行われた。縄文中期・後期の住居跡が 4 基発見され、4 号住居跡からは、漁網用の石錘がまとまって出土した。

昭和 63 年には、遺跡西側部分で、農道建設に先立つ確認調査（7 区 7 次調査）が行われたが、若干の遺物と小竪穴 3 基が見つかったのみであった。同年、6 区に隣接する地点（8 区）で住宅



第2図 大安寺遺跡
調査の位置
(S = 1/2500)



第3図 試堀グリッド
分布図(S = 1/400)

建設に先立つ緊急発掘調査が行われたが、縄文中期の住居跡が4基、後期の住居跡が3基発見された。後期の住居跡のうち、2基(11号及び13号住居跡)は敷石住居跡であったほか、もう1基(9号住居跡)からは、土器・石器などの遺物に混じって、獣骨と思われる骨片が多く出土しており、注目される。また、弥生時代初めの「条痕文系土器」の破片が、集中して見つかった。

平成4年には、遺跡北東部分で宅地造成に先立つ緊急発掘調査(9区9次調査)が行われ、縄文中期の住居跡1基・弥生時代後期の住居跡2基・中世の竪穴住居1基などが見つかった。

平成5年には、9区の上部道路脇において駐車場建設のための緊急発掘調査(10区10次調査)が行われた。小規模の調査で、黒色土から流れ込みと考えられる多量の礫を検出したため、調査はそこで終了された。遺構・遺物の検出は認められなかった。

3. 今回(11次)の調査について

今回の調査区が位置する場所は遺跡のなかでも上方の西端付近に位置し、昭和63年に行われた7次調査の農道に面している。7次調査の際には二次堆積と思われるローム層に礫混じりの黒色土が被さっており、若干の遺物と3基の小竪穴を検出したのみであった。今回の調査でも畑の表面に礫が露出している箇所がみられ、調査中も黒色土から大小さまざまな礫が認められた。

1グリッドは地表面からローム面までがたいへん浅く、耕作によってロームが削平された状況であった。グリッド南側で落ち込みを確認したが、精査の結果風倒木あるいは抜根による攪乱と判断された。またロームも細礫の混入した二次堆積ロームで、遺物も検出されなかった。

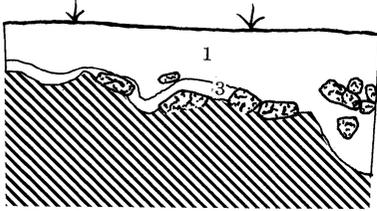
2グリッドも黒色土が削平され、耕作土から直接ローム層になっていた。耕作土から弥生土器の小破片と黒耀石の剥片を1点ずつ検出した。しかしロームは礫混じりの二次堆積ロームで、遺構の検出は認められなかった。

3グリッドは耕作土(表土)を剥いだところ、黒色土の存在が認められたが多量の礫を含み、礫の一部についてはローム層から突き出しているような状況も認められた。グリッド内全面が礫に覆われ、礫にも遺構的な要素がまったくみられないため、流れ込みによる礫と判断し掘り下げを終了した。遺構・遺物ともに検出されなかった。

4グリッドはやや深く、ローム層まで80cmであった。2層としてローム粒混じりの黒色土が20cmほど堆積しており、遺物も耕作土と、この2層から縄文土器片2点と弥生土器片が1点出土している。3層は3グリッドでみられた礫混じりの黒色土で3グリッドと同じく大小さまざまな礫が多量に混入している。4層も礫の混じった暗黄褐色土でローム層との漸移層的なものであろう。北西方向に向って傾斜が急で、遺構の検出は認められなかった。

以上が各グリッドの概要である。若干の遺物は認められたものの、遺構の検出はなく、削平や流れ込みによって遺構の残存する可能性はほとんどないものと考えられる。

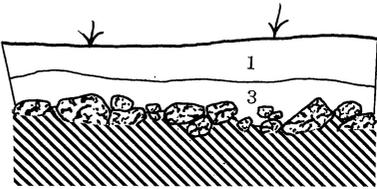
1 グリッド



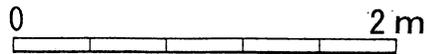
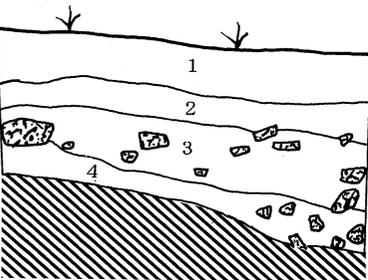
大安寺遺跡 1 1 区土層説明

- 1 黒色土 (耕作土)
- 2 黒色土
しまりやや良ローム粒少量含む。
- 3 黒色土
2よりやや暗く、礫多量に含む。しまり不良、流れ込みの堆積土層？
- 4 暗黄褐色土
礫混じりのローム層。黒色土粒を少量含む。
漸移層的。

3 グリッド



4 グリッド



第4図 大安寺遺跡 (11区11次) 各グリッド土層断面図 (S = 1/40)

IV 境日向遺跡の調査

1. 位置と環境

境日向遺跡は前述した大安寺遺跡の中ノ沢川を挟んだ対岸に位置している。大安寺遺跡と同じく中ノ沢川の扇状地および守屋山系の山裾から平坦部にかけて遺跡が展開している。ただし大安寺遺跡が南西山側になだらかな山裾をもつものに対して、境日向遺跡の山側は本城遺跡が展開する山麓（台地）から急激に落ちており、谷状にも見える地形の平坦部をその遺跡の範囲の南側としている。北側は本城遺跡から繋がる山麓を主体としている。周辺の遺跡には前述してきた大安寺遺跡や本城遺跡などの集落遺跡の他に、山姥塚古墳等が立地する。

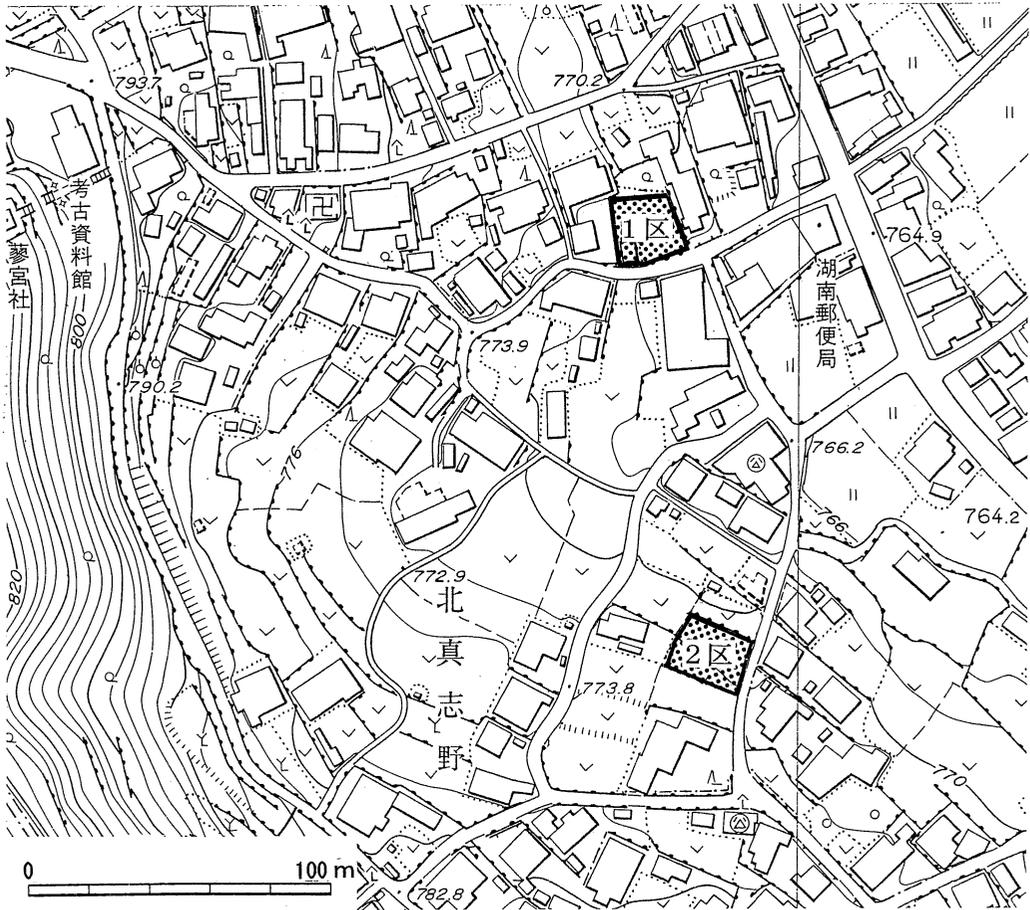
2. 過去における調査

本遺跡はその北側の斜面がすでに宅地化されており、平成5年まで発掘調査の記録はまったく無い。表採資料として弥生土器片や石包丁などがあつたとされていることから、弥生時代の集落址であった可能性が強い。今年度になって、7月に住宅建設にともない教育委員会職員による試掘調査（1区1次）が遺跡北側の東向きの斜面で行われ、これが境日向遺跡として初めての調査になった。1次調査では2m×2mの試掘グリッドが2ヶ所調査されたが、若干の遺物が検出されたものの礫の流れ込みや擁壁工事等による攪乱が著しく、遺構の検出がみられず、成果があげられなかった。ただし調査区内において、土師器の甕の口縁部破片が表採されており、境日向遺跡が他の周辺の遺跡と同じように弥生時代のみならず、その後の時代にも続く集落跡であったことを窺い知ることができよう。

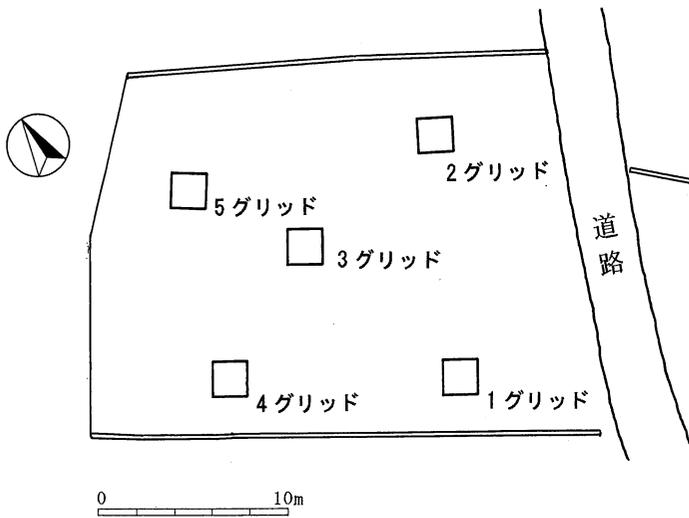
3. 今回（2次）の調査について

今回の調査位置は遺跡のなかでも下方の、ともすれば谷底のようにも見える平坦部であった。この地点は現在周知の遺跡の範囲として想定している南東の端にあたり、北側の山裾が遺跡の中心と考えられているなかで、どのような状況を示すのかが注目された。

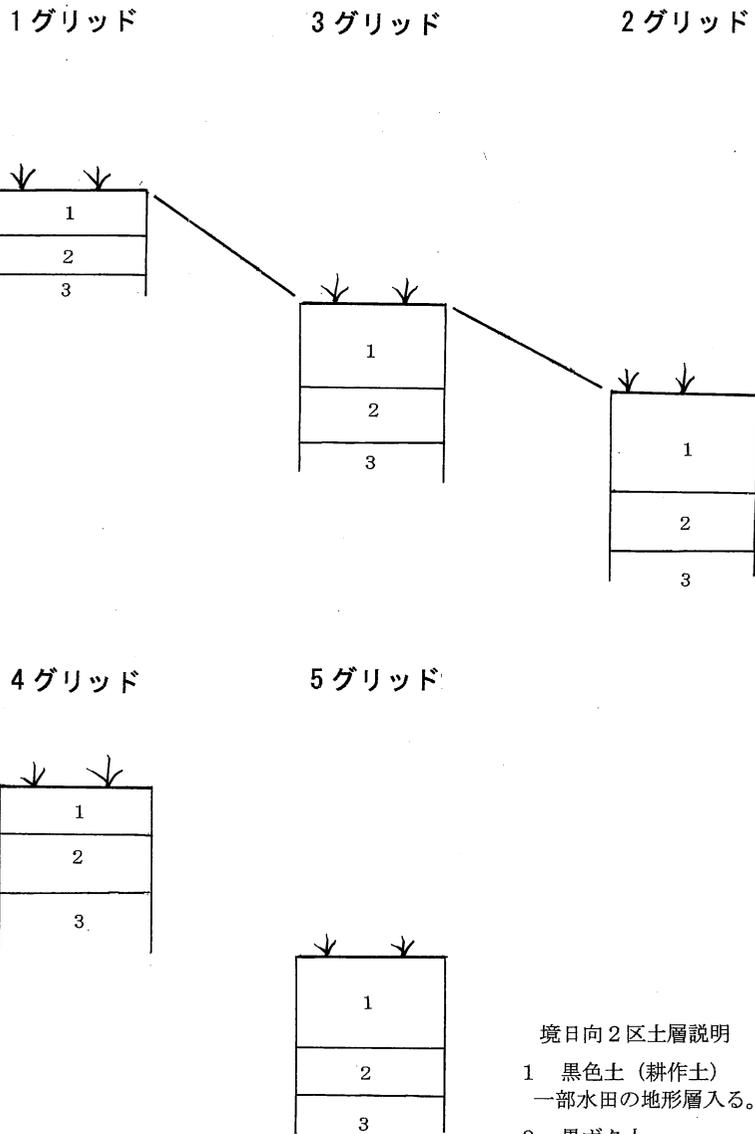
土層柱状図（第7図）をみればわかるとおり、5ヶ所のグリッドはほぼ同じ土層堆積状態であった。1層が表土で畑作による耕作土で一部水田の地形層が混じっている。2層が黒ボク土で礫やいわゆるくされ岩の細片が多量に混入していた。非常にしまりと粘性が強い土層で、スコップを使ってやっと掘るといった掘りにくい土であった。状況等からかなり水気を含みながら流れこんできた土ではないかと判断される。3層になると礫が非常に目立つようになる。砂質のローム層



第5図 境日向遺跡調査
の位置 (S=1/2500)



第6図 試掘グリッド
分布図 (S=1/400)



境日向 2 区土層説明

- 1 黒色土（耕作土）
一部水田の地形層入る。
- 2 黒ボク土
しまり非常に良い多量の礫含む。くされ岩の細粒多く含む。流れ込みによる 2 次堆積。
- 3 砂質ローム
礫が混じる。流れ込みの 2 次堆積層。

第 7 図 境日向遺跡（2 区 2 次）各グリッド土層断面図（S=1 / 4 0）

でこの土も流れ込みの土と判断される。

遺物については表採をはじめ、各グリッドから黒耀石剥片が41点、チャート剥片が1点検出され、土器片では弥生土器片が2点と中世に属すると思われる土器片が2点出土している。黒耀石剥片については細片がほとんどで、2層黒ボク土からの出土がいちばん多い。土器片は1層耕作土中の出土である。

遺構については5ヶ所調査したグリッド中では確認されなかった。

以上の結果から今回の調査区付近については、遺跡の中心から外れ、なおかつローム層および黒色土までが流れこんだ二次堆積の土層で遺物は多量に検出されたものの、生活の痕跡は認められず、この平坦地で集落を営むことはなかったものと判断される。しかし今まで調査が行われずデータが少ない本遺跡において弥生土器だけでなく中世の土器が出土したことは境日向遺跡の性格を考えるうえで貴重なデータとなろう。

V 調査のまとめ

今回の調査では2地点ともに若干の遺物の出土はみられたものの、遺構の存在は確認できなかった。どちらにもいえることであるが、予想以上に土層の堆積が不安定だったことがその第一因にあげられる。

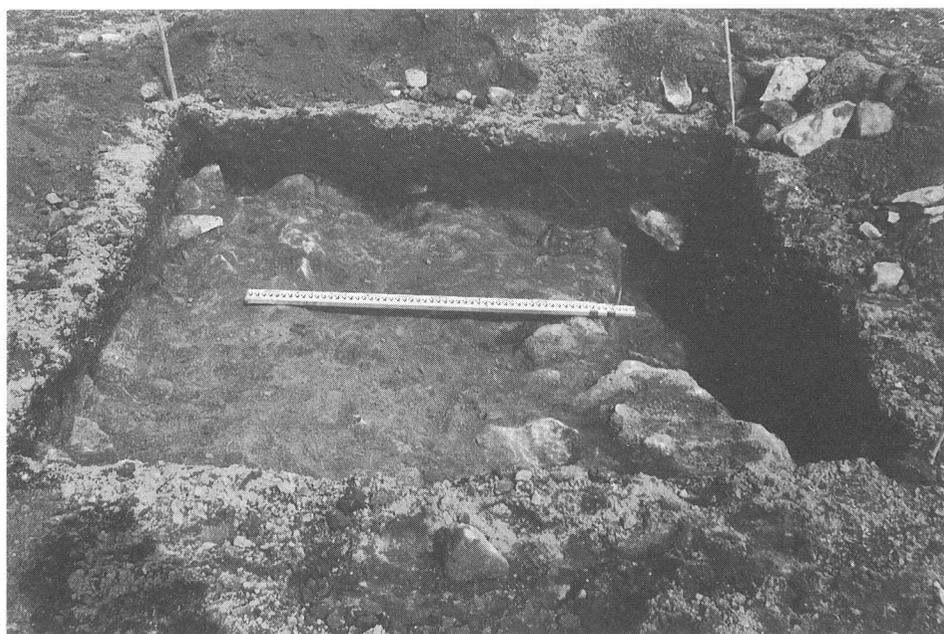
大安寺遺跡は遺跡全体が中ノ沢川の氾濫原にあり、特に今回の調査区の位置する山側は顕著である。それに加えて、過去の調査から旧地形を復元すると今回の調査区（遺跡の範囲）より西側には谷が入ることがわかっており、それに向って多量の土砂が流れこんでいるのであろう。そのため黒色土からローム層にかけて、かなり荒れた状況になっているものと考えられる。本遺跡の集落の中心は2・5・8・9次調査の行われた標高790m付近の緩斜面に位置し、今回の調査で遺跡の西限が確定できたものであろう。

境日向遺跡については今回の調査区は低地の平坦部ということもあり、かなり流れ込みが激しい状況であった。これらのロームおよび黒色土は本城遺跡の立地する山麓の台地と本遺跡の主体が立地すると考えられる山裾から土砂崩落などで流れこんで堆積したものと考えられ、出土した遺物についてもこれらの他の地点から土砂と一緒に搬入されたものであろう。境日向遺跡が営まれていた頃にはこの付近は低地あるいは谷状の地形をしており、生活の場としては利用されていなかったものと推定される。これらの結果から境日向遺跡については遺跡範囲の東南部の平坦低地には遺構の存在する可能性がほとんど無いことが判明した。

大安寺遺跡、境日向遺跡とも今回の調査ではいわゆる生活址は確認できなかったが、遺跡の範囲あるいは土地利用の面から貴重なデータを得ることができた調査であったといえよう。



1. 大安寺遺跡 11区 全景



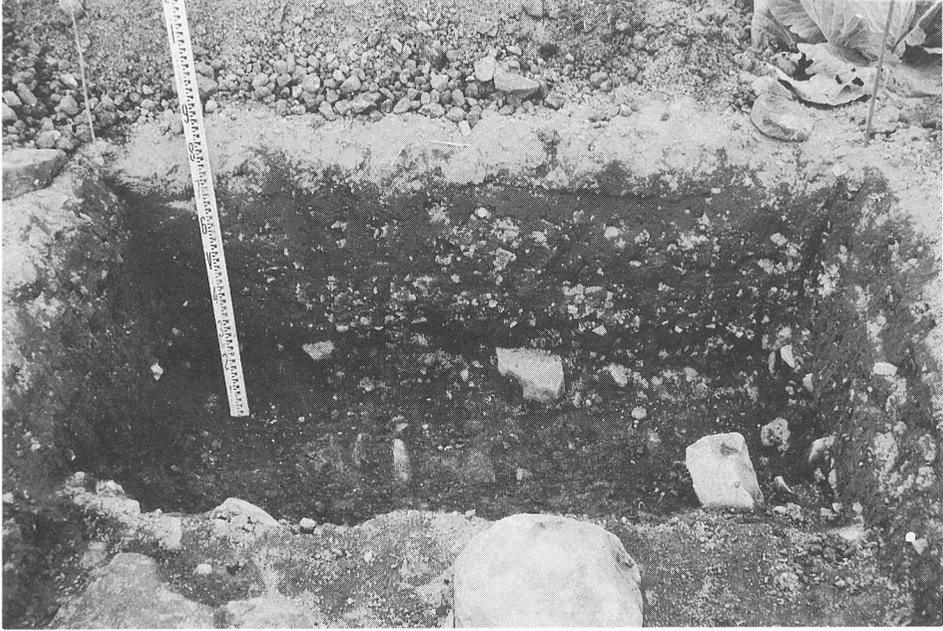
2. 大安寺遺跡 11区 1グリッド



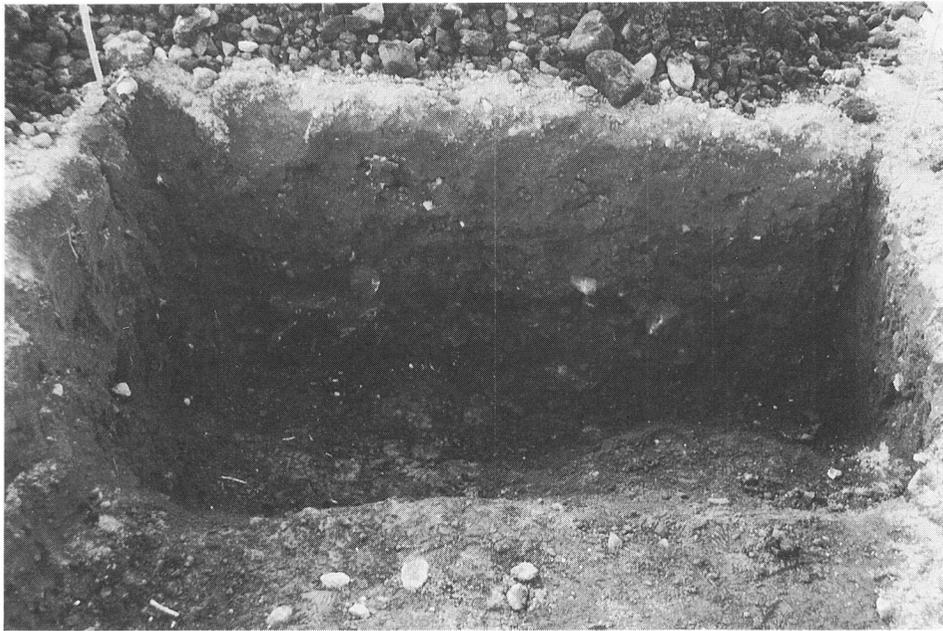
3. 大安寺遺跡 11区 3グリッド



4. 境日向遺跡 2区 全景



5. 境日向遺跡 2区 3グリッド



6. 境日向遺跡 2区 4グリッド

報告書抄録

ふりがな	だいあんじ4・さかいひなた							
書名	大安寺Ⅳ・境日向							
副書名	長野県諏訪市大安寺遺跡(11次)・境日向遺跡(2次)発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	諏訪市埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	第31集							
編著者名								
編集機関	諏訪市教育委員会							
所在地	〒392 長野県諏訪市高島 1-22-30 TEL0266 (52) 4141							
発行年月日	1995年 3月 22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいあんじいせき 大安寺遺跡	諏訪市 こなみ 湖南 7003-1	20,206	317	36° 00′ 50″	138° 05′ 26″	1994年 10月 6日	16m ²	住宅建設
さかいひなたいせき 境日向遺跡	諏訪市 こなみ 湖南 6149-1	20,206	332	36° 00′ 41″	138° 05′ 40″	1994年 10月 12日	20m ²	住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大安寺遺跡	集落遺跡	縄文 弥生			縄文土器片 黒曜石製石器類 弥生土器片			
境日向遺跡	集落遺跡	縄文 弥生 中世			石器類 弥生土器片 中世土器片			

大安寺Ⅳ・境日向

—長野県諏訪市大安寺遺跡（11次）・境日向遺跡（2次）発掘調査報告書—

平成7年3月22日

編集 諏訪市高島 1-22-30

発行 諏訪市教育委員会

印刷 (有) 八千代印刷
